京城新報

人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し急ぐ可らず

明治四十三年　紀元二千五百七十年
本紙定價（一枚金二錢▲一ヶ月前金…▲三ヶ月前金壹圓▲六ヶ月前金貳圓▲郵稅一ヶ月十五錢）
月曜日及び大祭日の翌日は休刊（日刊）
廣告料金（▲五號活字十七字詰一行一圓▲五十錢▲雜報欄特別廣告五號活字十七字詰一行金七十五錢）
發行兼編輯人　高木久馬太
印刷人　松久神一郎
京城西署西小門通（電話六六三）
發行所　京城新報社

寄書

京城日報と京城新報

（いづれが眞に帝國の御用を務めたるか）　折葉生

新聞紙は一面社會の出來事を正確に且つ迅速に報道すると同時に一面公衆の指導を爲すべき天職を有するもの也、斯の如きは三尺の兒童と雖どもよく知る所、然も在韓の操觚者にして此心得ある者果して幾人ありや、日韓兩國の關係が遂に今日の狀態に到達すべきことは火を睹るよりも明かなりしことに於て世の先覺者を以て任ずる新聞記者諸君は夙に之を察知し居られたる筈なり、余は在韓の記者諸君の未然を察するの明あり識見あることを信ぜんと欲する者なれども今日迄諸君が諸君の紙上に於て現されたる言論に由りて判斷すれば失禮ながら諸君は近眼者なりと言はざるを得ず、何を以てしかく無禮の言を爲すや、答へて曰く、諸君は在留の日本人をして豫め日韓今日の關係に適應せしむべく世人を指導することに何等爲す所なかりしを見て敢て然か斷言する者なりと。

此點に於て余は京城新報に對し多大の尊敬を有する者なり、我が愛讀する新報は常に日韓兩國民の親和を主張し、崇高なる理想に基く見地よりして在留邦人の或者が可憐無力なる韓人を虐待するを極筆批難して、以て邦人をして今日の時勢に適應せしめんことに努力せられたり、斯の如きは實に能く新聞記者の職責を盡したりといふべく、其功は永く沒す可からず、蓋し日韓兩國民の關係いまだ充分に親和せずして、やゝもすれば日本人が韓國暴民の犧牲となり、統監府の政策施設が往々にして韓人に誤解され反抗され妨害せらるゝは畢竟日本人が韓人に信用せられざるに基くもの而して日本人がしかく韓人に信用せられざる試一部の在留邦人が韓人を輕侮し虐待するに由るものなることは疑を容れず、此弊風を除去するに努力するはやがて社會の先覺者を以て任ずる操觚者の貴き任務にして、よく之を完ふするはとりも直さず國家の爲めに盡くし大日本帝國政府の大政翼を助くるものなり

此見地よりして余は所謂御用新聞たる京城日報を輕視し、其職責を盡くし得ざりしを遺憾とする者なり、蓋し統監府が日報に保護を與ふる、其關係に諛言を呈せしめんが爲めにはあらざるべし、伊藤公の遺しれける大政策大經綸を弘く世に傳へ世人をしてよく之を玩味せしめ了解せしめ、日韓兩國民を親和せしむるに貢獻せしめんが爲めなるを疑ひあるべからず、日報は兩國日本觀光團を組織し多少の成功を收めたるは余の多とする所なれど、これ以外に於て日常の言論に何等日韓兩國民の融和を圖る所なかりしは世の具眼者が齊しく奇怪とする所なる也、觀光團の如き擧は優る、然も彼の如き煙花的事業の效果は輕少にして日々月々諄々として說き切々として訴ゆるの深く且つ弘く世人を警醒するに比すべくもあらず、然も日報は此點に於て何等誇るに足るの功を擧げたることなし。

寺內統監は流石達觀の政治家なり、國家百年の大計を實行し有終の美を收めん爲めには日韓兩國民の親和を實現せしむるを以て第一の要義となし新聞記者を集めて之を教訓せられたり、京城日報は今更の如く難有げに其教訓を掲載したるが一體此の如き教訓を統監より受くるてとこれ既に記者の恥辱にして、記者等が統監の口より之を聞きて初めて悟る所ありたりとすれば沙汰の限りといふべし、然し既往は咎むるも詮なし今後在朝鮮の操觚者流特には御用新聞記者たる者博く智識を世界に求め、識見を養ひ、時勢に後れざることを力めて二度と此度の恥辱を繰返す勿れ

雜報

仁川貿易概況

（七月中に於ける）

七月中に於ける仁川貿易額は總計一百二十万〇四百九十九圓にして之れを前月の一百三十九万九千三百三十八圓に比すれば十九万八千八百三十九圓の減少にして又前年同月の一百三十九萬一千一百九十一圓に比し十九萬〇六百九十二圓の減退を示せり即ち左の如し

	七月	前月	前年七月
輸出	三七五、〇〇五	二九六、八三三	三二九、六九〇
輸入	八二五、四九四	一、一〇三、五〇七	一、〇六一、五〇一
合計	一、二〇〇、四九九	一、三九九、三三八	一、三九一、一九一

前表示すが如くにして本月の貿易は前月に比し輸出七萬八千餘圓を增加せるも輸入二十七萬餘圓を減少し又前年同月に比しては輸出五万五千餘圓を增加せるも輸入二十四万六千餘圓の減退を示せり今輸出入增減の概況を述べんに前月中に於ては濟國上海向け十七萬二千餘圓の人蔘輸出又前年同月中にも同人蔘二十萬圓の大輸出ありしに不拘如斯輸出增進を示せるは本月中米豆類の輸出好況なりしのみならず日本向け十七萬九千餘圓の軌條及同附屬品の再輸出ありしに基る而して輸入は當月中生金巾及シーチング晒金巾麻布絹布類其他夏向き商品の輸入閑散季に屬するを以て前月に比し每年本月は輸入額減退するの例あるも前年同月に比し如斯減退を示せるは一般經濟界の不振に基因するもの大なるべしと雖も亦鐵管鐵筒及セメント等水道用品として昨年中に於ては多額の輸入ありしも本年は既に水道敷設工事完成を告げ之等の輸入大ひに減少し又本年は鐵道用石炭及び其他の輸入品を釜山等に陸揚げして鐵道便に依り輸送するもの愈々多きを加へたる影響又大なるもの〻如し而して當港重要輸出入品の輸出入額を前月及び前年同月と比較すれば左表の如し

退韓記（四）

勸韓農生

柳兒足下、東京着後直ちに深川淨心寺なる祖先の墓に詣づ、出水後約一旬以上に亘るも未だ退水せず、門內より本堂に至る通路は濁水膝を沒して頗ぶる行步に困難を極め申し候、依て川越しの如き體たらくにて漸やく墓地に到り掃除を致し候所、殆んど手の着け樣なきに等しく、閉口仕り候、夫れより淺草なる自宅に參り候へば、出水當時は浸水の度、床上數尺に及び候とかにて何處も煤掃きの跡の如く疊を上げて今尙は假り住居致し居る始末に有之、而して近隣の人の語り合ふ事は何れも出水當時に於ける慘死者の噂さのみにて、昨日迄蝶よ花よといつくしみたる娘の可惜ら盛りを一夜の濁流に淩はれ敢なき最後を遂げたりとか乃至夫に先立たれたる妻、

俳句

如月會句集（一）

京城　東京　二蕉庵紫香宗匠撰

異帆洩し風の丸さや夏の月　彌生
名越した夜の寢心や雨の音　同
潜る鵜に浮ぶ鵜や星二三點　ひさし
橋の月は涼しゝ沖なます　萩水
公園に旗ばた〳〵と氷みせ　蕉華女
靑蘆や葦の間に鐙く生洲籠　萩水
無名鳥來鳴く安居の垣根哉　同
夕立ちて蠅の殖けり賤か家　生
溫泉の町の物々しさや靑簾　萩水
蝙蝠に草履臭れたり男の子　彌生
若竹や柳に餘る風の色　不美女
人攜子や二尺に足らぬ標石　不得
地橋かげは波に崩れつ夏の月　萩水
天淋とて植しは去年よ今年竹　ひさし
軸宿すべき疊はありて夏の月　撰者紫香



講談

大岡政談　越後傳吉

第六十二回　旭堂南陵講

近藤卜齋はこの邊で稀な易の先生　傳「御免下せね　近「ハイ……サア此方へ　切望れ這入りを……　傳「ハイ御免蒙ります　ズツと上つて來ると、机の前に卜齋白髮を胸の邊りまで垂れて、算木筮竹を備へ天眼鏡を傍に置いて控へて居ります、その年齡は五十八九歲、六十歲近い人、易者もこの位の年頃にならぬと、何うも信用して鑑て貰ふ氣になりません　傳「ハア　近「ハア、何ですね　傳「れ願でございます　近「ア、左樣か、いや宜しい夢の判斷承はりませう　傳「實は斯ういふ夢でございます」と、落もなくれ仙の話をした、近藤卜齋首を傾け　近「失禮ながら、貴下は御幾歲　傳「私い今年三十三歲でございます　近「ア、……指を繰りながら　近「成程元祿の八年ぢやナ……　傳「左樣でございます　近「れ生れは二黑の土星ですナ　傳「ハイ、爾うだでございます　近「夢を見たといふれ內儀は何歲でございます　傳「ア、私等の女房でございますか女房は二十八歲でございます　近「ア、六白の金ぢやナ　傳「ハイ暫くの間筮竹を取り、算木を繰つて考へて居りました近藤卜齋「近う寄んなさい　傳「ハア、有難うございます　近「エ、、私がこの易の卦に出た處を判斷をすると　傳「ハイ、近「鑑宅の屯難と云ふものに適つたのである　傳「これは、災難の前兆でございます　傳「ハイ　近「併し易經には險中に動く大いに亨る貞しとある　傳「ハイ　近「それはれ前さんの身に結構な事、近くば眼の前に大難がある、大難に陷る、即ち險中ぢや、その中にあつてもれ前が誠の心をば貫て働いて行き、氣を挽さなかつたら難て必ずその誠が天に亨て貞しい身になると云ふのぢやに依て、誠に明にれ前の身體が立て行のぢや、詰り晴天白日になる日輪が二ッ重つて上つて居るから靑天白日になつて、立派に其身を光り輝かすてとは謂合ひぢやが、水は色に取つて黑いもの、卦に取つては坎の卦ぢやテ、先づ私の判斷では災難ぢや、暗い處へでも陷るやうな事がありはせぬか、何か災難を身に受けて死ぬる程の苦みがありはせぬかと思ふ失禮ではござるが甚い夢ではございません、併しその場合になつても今いふ通り險中に動く大いに亨る貞しと云ふ事を忘れぬやう、誠意を貫く、氣魔ない事を云ます　傳「それが宜うございますので　近「夢では冠を被つて裝束を着けてれ前さんが馬に乘つて居た　傳「ハイ　近「これは私の考へで、間違つたられ笑ひなさいぢやが、れ前さんはれ百姓なら一村の監督をする名主、れ商人なら奉公人を使つて居る家の主人、何か知ら頭に立つれ人ぢや、れ前が頭に立つ人といふ心がれ前のれ內儀さんにあるから、冠を被つて裝束を着て馬に乘つて居るれ前の姿を見たんだ　近「ハイ、私等寳田村の傳吉と申しまして七ケ村の大庄屋で……　近「ア、爾うであらうと思つた　傳「ハア　近「が併し誠に惡い夢だね、氷の上を馬に乘つて渡る、その氷が割てれ前さんが沈んだのぢやな　傳「ハイ　近「詰り水に溺れたのぢや　傳「爾うでございます　近「卦面は水雷屯である、サア斯う云ふ事は素人のれ前に云ふても解るまいが、誠に惡い、水が割れると云ふのは危險が身に迫つて居ると考へなくちやアなりません馬と共に水に溺れたのは水雷を挽まさないで靑天白日をれ待ちなさい、先づこれまでじや神佛の信心を怠らぬやうして暮しないよ　近「ハイ……　正直一片の傳吉だから人のいふ言を決して疑はない、况てやこの人と思つて鑑て貰ひに來た易、悉く胸に陷りました　傳「宜う解りましてがす、有難う存じまして……折からガラガラッと表の戶が開くと　○「エ御免なさいませな、御免さいませ　近「ハイ〳〵、此所に居ります　○「ア、然うですかね、近藤卜齋と云ふ賣卜者は此方ですかね　近「こりやア酷いなナ、賣卜者は此方でございますとも……　ハイ〳〵卜齋は私でございますが　○「ツ、然うですかね、早く鑑て與んねね、早く……、ツ、うの何だ恐闘々々してないで魔混つかないで、早く鑑て與んな　近「一寸れ待ちなさいれ前さんのいふ事は何だかサッパリ解らない一体何を鑑ますので　○「何を鑑るたッて困つてるおやアねわか、私の嚊アが生きてるか、但しは手に入るか入らぬかを鑑て貰ひて白んで此方は江戶ッ兒だ、恐闘々々しないで早くして與んねね　近「れ待ちなさい、爾う足許から鳥が立つやうに急がれては困りますから……ア、傳吉さんとやら一寸れ待ち下さい、この人は江戶のれ方ださうで、大分急ッ込んで居られるやうですからコレ〳〵水でも一杯持つて來て進げて下さい、餘程顏色を見ると急ッ込んで居られるのは、何か御心配の樣子が人相にチャンと現はれて居る……　流石賣卜者だ人相を鑑るのが早い、思はない處で傳吉は江戶の吉原で見知り越なる木挽金太夫の伜金之助に出會ひ是れから泉河原の大難といふれ話